1年分、歩いちゃった!?

ウォーキングラリー'99

"完歩賞"もらったぞ

相模湖畔に集まった参加者

学生記者（文：白瀧　ちゑみ　写真・杉村　麻衣子）

恒例の「中大ウォーキングラリー」。5月30日、今年もまた快晴に恵まれた。スタート地点は相模湖畔の相模湖公園。山々に囲まれた、初夏ののどかな風景のなか、32キロのスタートを切った。

坊主頭にマジックで髪の毛を描いている人、ゆかた姿に日本人形を背負っている人、ジャングルの奥地に出かけるような恰好をしている人。ことしもユーモラスなパフォーマンスが多い。

相模湖エリアの山道が一部崩れているところにさしかかった。昨年7月の集中豪雨のツメ跡と聞かされ、自然の力に息を呑む。しかし、ここから高尾山口のチェックポイントまでは、美しい自然道のなかを木イチゴを拾って食べたり、小川に手を浸しながらの森林浴を楽しんだ。

32キロ…しだいに口数も少なく

学生記者の一行も、手づくりのノボリをかざして快調な足取り。周辺の山並みや八王子市街地が眼前に広がるたびに「あの山はなんだろう」「中大はどこかな」など話が弾む。山頂で昼食。すでに他のハイカーがお弁当を食べている。ほとんどが年配者だ。「カレーライスを持ってきたけど、食べきれなくてね」といって、われわれに分けてくれる人。「中大はすごいよ。駅伝をやらせても」と、やたら褒めてくれる人。

しかし、山頂で売っていた飲料水の高さには驚いた。「1本が200円」。これには参ったが、やはり誘惑には勝てなかった。

城山から高尾山口までは木々の間から差し込む光が美しい。「気持ちいいなぁ。これなら何キロでも歩けるなぁ」。まだ会話は弾む。高尾山に何度も登っているおばあさん2人。「いまの大学生は、ひ弱に見える。もっと、こういうところを歩いて体を鍛えればいいのに」と、言い残してズンズン歩く姿に、みんなびっく

り。「これから浅川沿いを歩いて、学校まで行くんです」と伝えると、今度は「土の上を歩くのは、土がクッションとなるので負担にならないけど、コンクリの上を歩くのは辛いよ」との温かいお言葉に、学生記者全員が「ありがとうございます」。

高尾山チェックポイントに着いた。ここでハーフコース組が合流し、参加者は560人に膨れ上がる。ハーフコース組の学生記者は、われわれを驚かそうと待ち構えていたが、私たちがなかなか到着しないので、逆に向こうが待ちくたびれていた。

そろいのバンダナ巻いて…

新たな気持ちで国道に沿って歩きはじめる。そんな中で私たちの目を慰めてくれたのは、民家の軒先に咲く数々の草花だった。露草、矢車草、バラなどに「きれいだなぁ」の声。ここまで山道を歩いてきて、自然の美しいものに対する感覚が呼び覚まされたのだろう。

間もなく浅川に出る。「幾つ橋の下を通り抜けたかな」といいながら、後は残りの20キロをひたすら歩く。川沿いのサイクリングロードには、ビンゴやクイズが待ち受ける。単調な景色に飽きてきた参加者に対する主催者側のサービスだが「もう少しあってもいいなあ」。途中、八王子市役所近くの河川敷で国際交流イベントが行われていた。〝ミニ牧場〟では牛やヤギを間近に見たり、マジックショーの公演や出店など、お祭り気分は最高潮だった。

森林浴なんて、久しぶりだな

ご苦労様…スタッフの皆さん

しばらく行くと、4階建ての長沼小学校を抜け、野猿峠に出た。「足が痛い」という声が聞こえてくる。だんだん、おしゃべりの数も減ってくる。マンションやコンビニの数の多さが、学校に近づいたことを感じさせてくれる。

ビンゴゲームをやりながら…

もう辺りは真っ暗。正門までの坂道を登ると、白い校舎だけははっきり見える。歩くスピードも次第に早くなってくる。スタッフの「お疲れさま」という声とともに、押された最後のスタンプ。そして何よりも「完歩賞」がうれしかった。

とにかく天気が良かった。参加者のうち、市民参加は180人にものぼった。今回、初めての参加だったが、いろいろな方ともめぐり合え、心身ともに実り多い一日だった。「ウォーキングラリー」を少しでも充実させようと頑張ってくれたスタッフ。コースの途中で、彼らのハッピ姿を見つけるとうれしくなり、感謝の気持ちで一杯になった。

完歩賞とともに、一生の思い出にしよう。

（巻末に写真特集）